

復興のシンボル・大崎市の災害公営住宅「古川十日町住宅」

今回の取り組み ● 株古川土地の官民一体となった街づくり

「ホテル跡をなんとかしてほしい……」。そんな声にこたえ、旧ホテル跡地に、災害公営住宅を建てた立て役者とは。

東日本大震災で住居を失った被災者の救済を目的とした宮城県大崎市の災害公営住宅「古川十日町住宅」が、旧ホテル古川ゴールデンパレス跡地に二〇一五年六月に完成した。

これで、同市が六カ所に整備していた災害公営住宅計百七十戸のすべてが完成。街なか居住による市街地活性化も一歩前進となり、期待が寄せられている。その立て役者となった株式会社古川土地・代表取締役の早坂竜太さんを訪ねた。

JR古川駅前、本社ビルにかかる「横綱白鵬関歴代新記録三十五回優勝」の垂れ幕がひと際、目についた。

白鵬関は、震災をきっかけに大崎市の観光大使となり、たびたび慰問に訪れている。

「古川駅に降り立った方への、おもてなしの心と、地域一体化への思いを込めています。震災当初は、がんばろう!!「日本」たすけあおう!!「日本」と掲げました。大崎市は内陸なので、沿岸部より震災の被害は少ないと思われがちですが、実は地震による被害

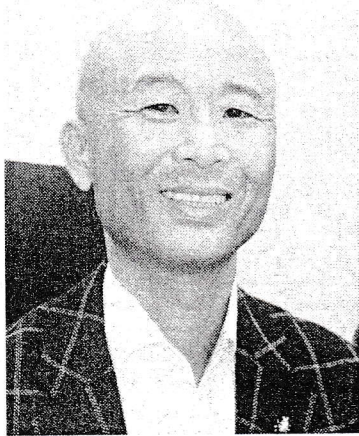


は、最大の地域でした。多くの家屋がつぶれ、地盤がゆるみ液状化現象が起きました」と当時を振り返りながら早坂さんは話す。

同社でも、第二ビル（五階建て）の全壊など甚大な被害を受けたが、困窮する被災者を救おうと、翌日から総出で被災状況の確認を始めた。そして、入居可能な物件を五日間で百五十件ほど確保し、いち早く開店したという。

「入居時の負担が少なくて済むように、まず仲介手数料を無料化。各物件のオーナー様にも敷金、礼金無料化へのご協力を懇願し、ほとんどのオーナー様が了解してくれました」

開店後は、長い待ち時間ができるほど、困窮



座右の銘は「一灯照隅 万灯照国」という早坂竜太社長。

した被災者が殺到。大崎地方の被災者が六割、沿岸部の被災者が四割。なかには

南三陸町志津川から約六十kmの遠路を、歩いて店に訪れた家族もあったという。

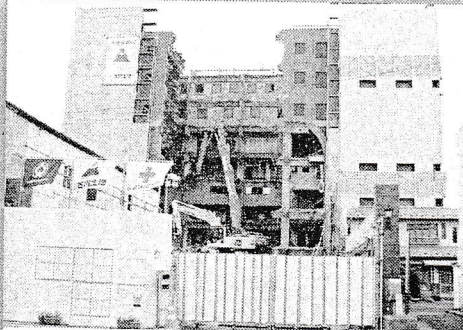
「目の前の命を助けたいという思いで、できることはすべて手を尽くしました」と、屈託のない笑顔の早坂さんが話す。

震災後、同社は、大崎市民病院新本院建設に共同企業体（JV）の構成員として元請で参画し、その後、災害公営住宅「古川駅東住宅（三十五戸）」と「古川十日町住宅（二十戸）」二箇所の建設を受託した。ホテル古川ゴールドンパレスは二〇〇二年に廃業して廃墟と化し、地震等による建物破損、非行少年やホームレスの侵入など、防犯、環境、危険性の問題が顕在化していた。それを自ら取得し五社の企業グループの代表として解体、建設したのだ。建物は鉄骨造り七階建て。一階には地域の集会などに活用できるコミュニティスペースを設けた。市は企業グループと約十億円で契約。企業グループがホテルの解体と住宅の建

設を行ない、市が建物、土地を買い取るとい
う方式だ。

これは被災者の住まい確保のみにとどまら
ず、防犯・防災上の意味もかなり大きく、今後
の街づくりに大きく影響を与えることになる。

「負の財産を、次の世代には遺せないとい
う使命感が湧きました。これまで手つかずだ
った中心市街地の街並み形成を、官民一体と
なって進める最後のチャンスだと思ったので
す。何事にも当事者意識が大切です」
なぜこうまでして、がむしゃらに陣頭を切
って取り組んでいるのだろうか。



●解体中の旧ホテル古川ゴールデンパレス。住民は安心したに違いない。



●完成した災害公営住宅「古川十日町住宅」。古川の街づくりに与える影響は大きい。

「私は、古川で生まれ、育てていただきました。やんちゃな高校生活を送っていた私に、恩師が『お前は他人様のお役に立つために生まれてきた』と熱く語ってくれました。だからこそ今の自分があり、いただいたご恩を学校や地域社会に返していきます」。座右の銘を聞くと、「一灯照隅万灯照国」と答えてくれた。

メガソーラー事業を手掛ける「おおさき未来エネルギー」を他社と共同で設立し、自身も副社長を務める。首都圏大崎連絡協議会顧問、横綱白鵬宮城野部屋大崎ファンクラブ幹事長など、本業の垣根を越えた三十余の肩書きをも
ちながら愛する故郷に恩返しをしている。

四季がはっきりしている大崎市の田園風景の中で、特に黄金色をした稲穂が実る秋の季節が一番好きだと話す。

早坂さんの話を聞いていると、大崎市の官民が交流し、魅力的な街づくりに向けて突き進んでいる未来が想像できるようだ。